

今月の逸品

NO. 51 2020.12~2021.01



万葉集 卷八(二四二六) 山部 赤人

わが背子に見せむと思ひし梅の花
それとも見えず雪の降れば

「雪中梅」

平成6(1994)年

額 : 890mm×650mm×46mm

たとえ一本の書線であっても、その表現技法によって、線の周辺に、ある種の力を感じることがある。例えば磁石のまわりに生じる磁力のようなもので、これを線の「響き」と呼ぶ。この井茂圭洞の作品も、例えば二行目の「し」の字は、左右に広い空間(余白)がとられているが、線の響きが高いため、その空間は非常に充実したものとして眼に映る。

このように、井茂圭洞は「響き」の感覚に鋭敏で、書線の「黒」と、その周辺の余白の「白」のバランスが絶妙である。この作品においても「し」の字の左右の余白だけでなく、上下左右、特に左上部には広い余白が存在している。しかし、その余白は、決して不要な余った空間ではなく、この作品には必要不可欠な造形空間であると感じられ、切り取る事を許さない、大切な構成部分なのである。これを本人は「要白」と呼ぶが、その余白を形成しているのが、井茂の書線の「響き」の高さである。しかし、このような響きの高い書線は、一朝一夕で身につくものではない。井茂も高い書線を手にするために、修練を重ねた事であろうし、その修練を今も続けているに違いない。

このような書作への姿勢と、持って生まれた天賦の才が相俟って、井茂圭洞は、日本文化の向上発展に関し、功績顕著な者として認められ、平成30(2018)年に文化功労者に選定されるという栄に浴している。

執筆者：岡田直樹(美術科 教授)

※附属図書館で展示しています。